

先人の知恵から

30

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

30回目。相当スピードアップしないと、この調子だと後 60 回かかる??それは大変!同じような内容のものも出てくるので、今まで出したものと被らないよう気をつけよう。今回は次の7つ。

- ・三人虎を成す
- ・三年経てば三つになる
- ・鹿を逐う者は山を見ず
- ・地藏は言わぬがわれ言うな
- ・親しき仲に礼儀あり
- ・習慣は第二の天性なり
- ・十七、八は藪力

<三人虎を成す>

事実でなくても、多くの人が言え、いつか事実と思われるようになることたとえ。一人が「虎が出た」と言っても信じられないが、三人が次々にそう言うと、本当に虎が出たかのように信じられてくることから。

「三人よれば金をも溶かす」「衆口金を爍かす」も同義。

出典:戦国策

子どもたちのLINEやSNSでの噂話や悪口、思いつきや知ったかぶりなどで様々なトラブルが起こっている。そこで、子どもたちだけではなく保護者達も同様に、誰かの噂話にのらない事、悪口に同調しないことを伝えている。一度出してしまった言葉は引っ込められない。それがLINEやSNSだと尚更に引っ込みがつかなくなる。いくら削除しても、既に人から人へ伝わって、当の本人とは全く何の関係もないところまで広がってしまう。人の言葉と言うのは怖いものである。

この諺の様に、世の中ではこうしたことが沢山みられる。SNSで流されていることは、嘘も真実もないまぜになっている。また、広告も一緒である。詐欺まがいの広告やSNSでの上手い話も、〇〇博士とか

医師、或いは先生などと呼ばれる人が三人
真実のごとく語れば、それはどんないい加
減な、嘘八百であっても真実と思われてし
まう。〇〇博士とか医師が嘘であっても、
それをいちいち調べる人も少ない。情報と
は便利でありながら、利用するものが余程
注意し、賢くないととんでもないことにな
るという戒めとして、この諺を使う。

以前に紹介した「一人虚を伝うれば万人
実を伝う」も同様の意味。

〈三年経てば三つになる〉

どんな人でも物でも、全く変わらないと
いうことはない。時が経てばそれに応じて
成長し、変化するという。生まれた子
も、三年経てば三歳になるの意から。

発達障がいの相談が、学校でも私設事務
所でも多い。障がいと言われると、もうず
っと変わらないと思う人や、反対に、障が
いは病気だから治ると思う人など色々な
が、どちらも違う。知的に高い発達障がい
であれば、知的な部分でカバーしたり工夫
したりすることで、日常生活であまり困ら
ないようにしていくことが出来る場合があ
る。しかし障がいが治るわけではない。知
的にそれほど高くなくても、物事のパター
ン化や本人にやりやすいやり方を見つける
ことが出来れば変わっていきける。衝動性や
多動性については投薬で多少コントロール
できるケースもある。発達に凸凹がある子
ども達や大人であっても、全く変化しない
わけではない。少しずつ、ちょっとずつ、
緩やかでも変化は必ずある。我が子が発達
障がいであるということを受け入れること

はとても難しい。しかし、この諺でほんの
少しでも気持ちが楽になればと伝えている。

〈鹿を逐う者は山を見ず〉

一つのこと熱中すると、他のことを顧
みる余裕がなくなるこのたとえ。また、
目先の利益を追っている者は、それ以外の
者が見えず、道理を忘れるというたとえ。
鹿を捉えようと追い回している者は、獲物
に気をとられて山全体のことが目に入ら
ないという意から。「鹿を逐う獵師は山を見ず」
ともいう。

出典：淮南子

視野が狭くなるということはだれしも経
験があると思う。何かに夢中になっている
時もそうだが、1 つのことを気にしだすと
ずっとそのことが気になってしまって他の
ことが考えられなくなる。そんなことが子
育て中の親にも時々見られる。小さなこと
に拘って、全体を見失ってしまうと、子ど
もにとっても親にとっても良い結果は招か
ない。

以前とても想像力豊かな子がいた。彼女
は時々ボーっとしているが、そういう時は
いつも色々な想像の中でとても楽しい時間
を過ごしていた。物語を考え、その物語は
想像の中でどんどん進み広がって行った。
話を聴いてみたらそれはそれは面白くて可
愛い話であった。ただ、その子は授業中も
ちょっと時間が余ると想像の世界に入り込
んでしまうのである。「窓際のトットちゃん」
を思い浮かべる人もいるような子なのであ
る。しかし、注意力が散漫と思われた為、

教師から叱られることが増えた。母親は教師に子どもの様子を伝えられ、家でも母親が叱るようになり、その挙句に子どもは、想像することを禁止されてしまったのである。それでもそう簡単に想像を止めることなどできない。困った母親が相談に来た。

想像することの素晴らしさ、楽しさ。それが無ければ、芸術も科学も成り立たないのではないか？授業に集中できないのは、もしかしたら授業が楽しくないからかもしれない。そんなことを考えながら、この諺を母親に伝え、その子の持つ素晴らしい能力を認め、お話を書いてみる事や、録音することなどを勧めた。母親にしてみれば、どうやって想像するのを止めたらよいのかと聞いたかったのだろうが、全く異なる助言にびっくりしたようだったが、なるほどと納得しやってみると言って帰って行った。その後特に母親が相談に来ることは無かった。

以前に挙げた「一葉目を^{おお}蔽^{たいざん}えば泰山を見ず」や「一悪を以てその善を忘れず」にも重なる意味合いの諺である。

<地蔵は言わぬがわれ言うな>

うっかり秘密を漏らすことが多いから口には気をつけよという戒め。秘密を打ち明けたりするとき、相手に「人に言うな」と口止めするが、むしろ、自分があちこちに漏らすことが多いことから、「俺は言わぬがわれ言うな」ともいう。

大体秘密というものは漏れるものである。「誰にも言わないでね」と言って誰かに話したら、その人がまた誰かに「誰にも言わ

ないでね」と伝えてしまうものである。秘密を守りたかったら、絶対に誰にも言わない事だ。秘密を誰かに伝える時は漏れることを覚悟すべきである。もちろん我々心理士/師は守秘義務があるので、きちんと守るが、一般的には守られないと思った方が良い。

最近ではSNS、LINEやInstagramでも秘密の漏洩が目立つ。プライバシーの侵害も見られる。そんな時代に加えて、どれだけの人が地蔵の様に黙っていられるだろう？自分がそもそも秘密を漏らすことが多いというこの諺は今も使いやすい。

<親しき中に礼儀あり>

どんなに親しい間柄でも、礼儀は守らなければならないということ。親しみが過ぎて礼を失するようなことがあれば、かえって不和となりやすいということ。

友人関係について、子どもたちはいつも悩んでいる。生のコミュニケーションが全体的に減っている昨今では、友達との心理的距離をつかみづらくなっている。ついつい馴れ馴れしくしてしまったり避けられたり、或いは距離を取り過ぎて関係が切れてしまったり。程々というのが難しくなっている。

子どもたちにその距離感を伝えるのも中々難しい。ただ昔からこんな諺があると紹介し、どんなに親しくなっても、お礼を言ったり挨拶をしたりすることは忘れてはいけないこと、それが関係を維持することになると伝えている。

<習慣は第二の天性なり>

身についた習慣は、いつしかその人に深くしみ込んで、まるで生まれつきの性質のようになるということ。古代ギリシャの哲学者ディオゲネスのことは、「習慣は自然の如し」も同義。

何事も習慣づけるのは中々大変である。大学で授業を持っているが、教職課程なので、先生になることを考えている学生もいる。そこで先生になるとしたら、子どもたちにどのように学習を習慣づけるかという課題を出すことがある。

一般的に学校では宿題を出す。家庭学習も課すところもある。そうすることで学習を習慣づけようとしている。小学1年生では、親がつきっきりでやらせる家もあるだろう。

宿題が必ずしも学習する習慣をつけることに繋がるかどうかは疑問である。宿題をしなければ叱られる、表に×がつく、やっへ行けばシールを貰える、褒められるなどで子どもたちは仕方なくやっている。楽しくてやっている子はいるだろうか？家庭学習も、親が決めた内容を仕方なくやっている子も多い。それでは習慣づくこととは程遠い。

習慣づけるには、毎日少しずつ、簡単なことを続けることではないだろうか？例えば、歯磨きは毎日やっているうちに習慣になっていくだろう。

歯を磨かないと気持ちが悪いくらいになればしっかりとした習慣になっている。夜寝る時はパジャマに着替えるなども同じ理屈だし、服のまま寝るよりは身体が楽だというのもある。勉強を習慣づけるなら、毎日

ほんの少し、興味があることからやらせてみる。1年生であれば、字を書くことでも、絵を描くことでも、何かを調べることでも身体を動かすことでも、何でも良い。そして、楽しいとか、面白いとか、やって気持ちが良いとか、自分にとって心地よいものがあればそれは続くだろう。そして続けているうちに習慣となっていく。習慣になれば自然に、特に強く意識しなくても出来るようになる。

勉強に限らず、なんにしても、習慣になってしまえば、自分の一部となり何の苦もなく続けて行くことが出来る。そこに至るまでは、まずは面白い、楽しいと思うことが一番だろう。

保護者から「片付けが出来ない」とか「勉強しない」という相談を度々受ける。そういう時こんな諺を伝え、楽しみながら出来るようにさせてはどうかと助言している。

英語では・・・

Custom is a second nature. (習慣は第二の天性なり)

<十七、八は藪力>

十七、八の年頃は、根のしっかり張った竹をも引き抜くくらいのとてつもない力が出るということ。

十七、八歳の頃と言うのは、多くの人が若々しくて、エネルギーである。知識欲も吸収力も素晴らしい時期である。歳をとって思い返してみると、筆者自身も含め、もっとあの頃にしっかり勉強しておけばと思う人は多いだろう。しかしつつい、楽

しいことにかまけてしまい、勉強を怠ってしまう。スポーツでもなんでもこの時期は自分の能力を発揮できる一番の時期かもしれない。最近では人生が長くなった分、能力のピークが少し後ろにずれこんでいるかもしれないが、兎に角、人には最高の時期と言うのがある。そういう意味で、この諺を伝え、その子がもしその時期の前なら、これからその時期が来ることを、そして今その時期であるなら、今頑張れば結果が出るであろうことを伝えている。

出典説明：

戦国策 全三十三編。

中国の雑史。前漢の劉向^{りゅうきやう}の編。戦国時代に諸国を遊説した縦横家^{じゅうおうか}が諸侯に説いた戦略を、国別に集めて三十三編にまとめた書。いくつかの書にのっているものを校訂・編集したもので、当時の政治・外交・軍事などを知るための貴重な資料。現在伝わるものは、北宋の曾鞏^{そうきやう}が欠けた部分を補って編纂したものに姚宏^{ようこう}が注を加えた三十三巻本と、鮑彪^{ほうひやう}の十巻本の二系統がある。

淮南子 内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦^{りゅうほう}の孫である淮南王劉安^{わいなんおうりゅうあん}。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

偶成

西郷隆盛が大久保利通に寄せた詩。